

会長所感

兵庫県同窓生の皆様のご協力で、今回も同窓会支部だより (第 18 号) を発行することができましたこと、心より厚く御礼を申し上げます。

この本県の支部だよりは、年 1 回の発行であり、今回は県内の同窓生からの寄稿や近況報告を掲載しています。その掲載する内容は個人情報でありますので、同窓生間の情報共有のみとし、外部への流出防止を十分注意し取り扱うようにしています。また、その発行経費は一部同窓生の皆様からの会費から賄っています。

このような支部だよりを今後も継続するのか、又は廃刊とするのかという議論を次年度の総会で行い、結論を出さなければならぬと思っています。

また、時代の変化や同窓生の高齢化を考えたとき、同窓会支部のあり方も議論しなければならない時期になったと痛感しています。

高校や大学の同窓会が会員意識の希薄化で成り立たなくなっているという声を聞くが、わが母校の同窓会を考えたとき、同じような危機に直面しているように思えてなりません。

せめて本県の同窓生支部の灯火だけは、消さぬようにしなければならないと願うのですが……。

兵庫県支部会長 福井 寛行 (26 期生)

私達が卒業した 鯉淵学園とは 出店 利彦 (19 期生)

私が学園に入学したのは、昭和 36 年農業基本法が法制化された翌年であり、2 年

間の学業を終えました。

その後、農村の指導者として 35 年、退職後、家業の農業従事に 25 年、86 歳を生きた人生の中で、教授、同窓生、鯉淵学園兵庫県支部だより等々の交流で鯉淵学園とは、どんな教育機関であったのかを 3 項目に整理しましょう。

1. 1 学年 160 名で、修業年限 2 年間で 320 名の全寮制の雰囲気を持った学園

2 年間の共同生活は、他の大学では見慣れないような雰囲気を持った学園でありました。学園寮歌の一文に、「ああ我が友よ握りたる この手の温もり忘れめや」寝食を共にする共同生活はお互いの長い人生を結びつけてくれました。同窓生は期別を問わず相互訪問も盛んでありました。

加えて教職員の多くが学園の近くに居住し、正月や夏休みなど教授の家で食事をご馳走になり、人生を語り合ったことなど講義以外の勉強ができました。

全国から来ているので、私の同室で九州から来ていた先輩は、元旦の「雑煮」は餅ではなく、里芋を食べるといふ情報に接し、日本文化の広さと深さを知りました。全寮制は学園の気風を作り出してきたと言えます。



2. 学園の教育は、机上だけでなく、専門学科、教養学科、実験、実習の四位の教育を志している

札幌農学校的那須 浩教授は、半日学科で、半日実習の精神を取り入れたと言われ、その碩学の同士であった鯉淵学園初代学園長の小出満二先生のプログラムと言われています。

農村の指導者を目指す学園は、科学技術と各種の実習と実験を通じ、実践力を高め、

即現場で役立つ人材と奥深い人間性を養う教育機関であります。ここで学んだ同窓生は、心の底が他人には分からない深い洞察力を持ち合わせた農村指導者として巣立っていったものと思います。鯉淵の卒業生は腹が太いと何度も耳にしたことか。

2年修業の短大としての単位を修得し、全国に散らばっている同窓生たちは、2代目鞍田学園長の農政学講座を通して学んだ科学技術を農業や生活に取り入れて、農村近代化に貢献、つまり現在でいうスマート農業の発展に全力を傾けた功績はとても大きなものがあります。

3. 学園は関東の平地林に囲まれた農村にあり、学生も農村出身者が多く、学園特有の精神の持ち主を生み出してきた

学園の卒業生は、荒削りであり、安定した農村よりも、零細農業や不利な農村の中で、困難を克服する強靱な精神を兼ね備えていると言えよう。不利な立地で産地育成を目指したり、新規作物の導入に成功し、大産地に導いた例を探してみると、学園卒業生に行き着くことが多い。

また、農村生活の改善の進んでいる地域には必ずと言ってよいほど、若竹寮の諸君を忘れることはできません。

若竹寮の人たちほど度胸があって、問題解決能力にたけた人材は他に少なく、日本一の学生であります。そんな精神を学園が植え付けて巣立っていったのが若竹寮の人々であることを特筆したいと思います。

私は、学園の卒業は学業の終了ではない、社会生活のスタートを意味するもので、学業の積み重ねほど大切なものはないと思います、今も勉学を忘れてはいません。

近況報告

今年の5月、同窓生各位に会員名簿用の異動通知と近況報告を依頼しましたところ、14名の方から報告がありました。

近況報告の締め切りを6月下旬にして、その後に編集作業をしましたので、大変遅れています。2ヶ月前に原稿を頂戴していた同窓生の皆さんには、季節の話題を掲載できなくて、大変申し訳なく思っています。また、原稿を見て、少し誤字や難文などがあったので、断りもなく修正した箇所があります。何卒ご理解の程よろしくお願いいたします。

中嶋 則子 (15期生)

先日、結婚のお世話した方が金婚式を迎えましたと訪ねてこられ、私も歳が行くはずだと思う日々を過ごしています。数えれば36組程の結婚のお世話をしてきたなど整理をしています。人それぞれに色々な人生があったと思いますが、仲よく夫婦で過ごしてこられたことは幸せだったのではないかと嬉しく思っています。

足の手術も2度もして杖の生活をしていますが、口と目と耳だけは今のところ元気です。一度お会いしたい人達がいっぱいですが無理なことですネ。お元気で！！

長峰 年正 (19期生)

元気に過ごしています。学園での思い出に慕う事多くなり、皆様の思い出に心しつつ過ごしています。今は多様な方々(校長先生、公務員、JA職員)と、月2回程、古寺を巡礼しています。終わりに人生の終焉とは如何なるものか？皆で話し合っています。



岩本 佐知子 (20期生)

晴耕雨読の毎日です。晴れた日は家庭菜園づくりです。取っても、取っても茂る草と共に暮らしています。

また、雨が降れば、本を読んだり、俳句を作ったりしています。これからも、健康を一番に、山里で野菜や趣味の俳句を作ったりしたいです。

『草を引く今日一日の生きた証し』の気分です。



高木 経吉 (22 期生)

年末、正月、成人式シーズンに雪がなく、但馬は閑古鳥(カニは別)が鳴いていました。2月に田畑の耕耘が出来たのは悪い前兆なのか、春の病害虫の増加が目に見えるようでした。

但馬の2月は、小豆島、四国への遍路参りが常の行事ですが、「コロナ」が遍路客の減少、宿の廃業、小さな寺の廃業、フェリーの減便までに影響しているようです。

しかし、JAたじまが3月13日~14日の日程で能登・山代温泉方面に災害見舞バス旅行(2台)を実施したので、参加して楽しんできました。

なんと!! 2月22日に竹野の奥田和夫先輩がテレビ「ダーツの旅」に出ました。但馬の一大ニュースでした。

5月18日から20日間ほど、田植え、トラクターによる耕起があったので、ボツボツ体が壊れるようだった!

6月24日~26日には、長野で21期、22期、23期の合同同期会が行われました。

田中 義治 (23 期生)

5月末で喜寿を迎えて、生きている今に感謝して、妻の介護に努め、毎日を送っています。

長尾 輝夫 (24 期生)

最近では加齢現象が進行し、何事も思うようにはかどらない中、去年は温暖化の影響を受け(?)、黒大豆(20a)は収穫ゼロ、出荷米の半分は3等米、農業収支は大赤字でした。身体がまだ動くので、廃業は延期し、もう少し頑張ります。



吉川 千鶴子 (24 期生)

元気に過ごしております。昨年主人が交通事故で2ヶ月半程入院しました。一時はどうなることかと心配しておりましたが、大分元気になりリハビリに励んでいます。私は畑で自家用野菜、ネギと秋の彼岸用のキクを作っていて、Aコープの生産者コーナーと道の駅に出荷しています。その他に多可町シニアクラブの理事をしていて何かと忙しい日々です。

西浦 英子 (24 期生)

今年も6月1日、田植え終了。76歳のバアバは苗出しのお手伝い。無事早苗田になり、山・家・木々が映る水田鏡の風景はいいものですね。我等が空から眺める頃はどんな光景に?

そして6月13日、朝より一週間は我が家では白のスイートコーンの朝出し作業です(朝収穫し、べっぴんさんにして、たじまんまへ出荷)。今年はコーンにとって似合う季候なのか、虫も少なく満足の商品です。(梅は無に等しい年ですが)

6月11日、中学校の喜寿同窓会があり、久しぶりにゆっくり海の風を感じつつ、ここが人生のスタートライン、鯉淵へ、豊岡へ、二年間の御縁があればこそその人生、ありがとう!!



西田 博 (25 期生)

米、黒大豆中心の農業をしています。身体に気を付けながら。健康のためにも、出来るだけ続けたいと思っています。ただ、農業の後継者不足が深刻さを増すばかりです。

福井 寛行 (26 期生)

今年、後期高齢者の仲間入りをさせていただきました。今年約1反5畝の畑に野菜のほか黒大豆などを栽培中。ただ、イタ

チ、タヌキなどの害獣の被害に困っていたので、海のヒトデの乾燥粉末を野菜の畝回りに蒔くと非常に効果がありました。今では害獣被害に困っている農家に紹介し喜ばれています。

相変わらず地域や町の役で走り回っていますが、人生のよい経験だと頭を切り換え楽しみながらやっています。

辻 伴子 (27期生)

72歳の誕生日を迎えてから、私もいつまで仕事ができるのかなあ～、なんて考えていましたけど、お陰様で頭も身体もまだ大丈夫な様ですので、あと2～3年程は主人と二人、息子夫婦と伴走しながら、バトンタッチしようと考え直し、頑張っております。

相変わらず、趣味の水墨画や園芸関係の活動も続けながら、今年から体力づくりのため、ジム通いや老人クラブの活動も参加しております。

自分に見合った仕事と趣味、そして体力づくりや地域活動など、日々充実した生活を送っております。仲間達と元気で色々な事を楽しみながらやれる事が私の生き甲斐だと思って。



小森 英逸 (31期生)

令和6年度丹波市市辺自治会長を務めています。4月に総会、5月市辺フェスタを行い、ようやく落ち着き、ほっとしています。昨年11月には、31期会に出席し、楽しいひとときを過ごしました。今後ともよろしくお願い申し上げます。

木村 毅司 (33期生)

丹波ささやま農協に37年間勤め退職、その後、丹波篠山市農都政策課で「人・農地プランと地域計画」の作成に6年間携わりましたが、もうすぐ67歳という年齢

と政府が推し進める農業政策と現実とのギャップを感じ3月末で退職。

現在は、水稻、黒大豆を中心に栽培に励んでいます。当集落の高齢化率も46%に達し、平日圃場に出ているのは数人で言い表せない寂しさを感じている今日です。



高見 康彦 (44期生)

少しずつ規模を増やしながら、元気に農業しています。

同窓生の訃報

- ・ 普光江 文江 (12期生)
(令和6年3月30日逝去)
- ・ 甲谷 克己 (21期生)
(令和6年6月21日逝去)

ある日、突然に先輩お二人の訃報を家族の方から知らされ、心が痛む思いであります。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

今年の夏は10年の一度の酷暑という天気予報。畑の野菜は日照りと水不足でカラカラ。ギラギラの太陽で顔は真っ黒、体はバテバテ。熱中症にならないために水をゴクゴク。昼寝はエアコンを効かせてグーグー。夜は冷たいビールをグイグイと一気飲み！

このような酷暑の暮らしが続いていますが、涼秋が待ち遠しいと感じるのは、編集者ばかりではないと思います。

同窓生の皆様は、どのような暮らしをされていますか？

令和6年8月

発行編集責任者

同窓会兵庫県支部会長

福井寛行 (26期生)